

北海道開拓の村 冬の生活体験

わら細工

《雪踏(ふ)み俵(だわら)》



藁(わら)で製作した雪踏み具である。

雪を踏み固め道をつけることから「雪踏み」、あるいは、炭俵(すみだわら)や米俵(こめだわら)と同じように編み、底部の内側と外側に棧俵(さんだわら)(炭俵や米俵のふた)を取り付けることから「踏み俵」とも呼ばれる。

また、足で踏む作業を手で補助するため、ひもを取り付けたものが一般的であった。

雪が降り積もった朝には子ども達が学校へ出かける前に雪を踏んで道付けするのが日課であったが、北海道では、本州に比べ雪質がさらさらしているため、カンジキで雪を踏み固めることが多かったようである。

※雪踏み俵は開拓の村・体験学習棟に展示しています。

《深靴(ふかぐつ) (深藁靴(ふかわらぐつ)) 》



深靴は、ゴム長靴や防寒靴が普及するまで、冬の履物としては最も一般的であった。

北海道では、稲作が定着する以前は東北や北陸地方から移入することが多かったが、稲作が普及し始める大正から昭和初期にかけて、凶作や不漁に備えるための副業の一つとしてわら細工が奨励(しょうれい)された。しかし、北海道産のわらは丈が短く柔らかいため、わざわざ本州からわらを購入する村もあり、わらは人々の生活と密接に関係するようになった。裕福な家庭では、商店でわら製品を買ったが、多くの家庭では古米俵を買い、ほぐして作った。

《背簀(はねけら)》

雨具の簀には、両肩と背中、腰部全体を覆う「胴簀(丸簀)」、型と背中にあてる「けら(背簀・日照り簀)」、腰に巻くだけの「腰簀」などがある。

背簀は、北海道では冬の防寒衣としても使われ、府県ではけらを背にあてて夏の強い日差しを避けるためにも使った。背簀は、ゴム雨合羽が普及する大正末から昭和初期頃まで使われた。

※背簀は開拓の村「冬の生活体験」では体験できません。



参考資料：○北海道の民具（北海道開拓記念館・監修、大久保一良・画、北海道新聞社）

○わら細工と冬の衣装（2005 北海道開拓の村道庁ロビー展）

○北海道開拓記念館第20回特別展・雪と氷と人間(目録)、第46回特別展・雪と寒さと文化(目録)

冬の生活体験④【製作：北海道歴史文化財団 2016.12】